

「コミュニティバス」利用促進へ

地域に適した姿を模索

地域の交通事情に応じて、住民の貴重な移動手段として運行するコミュニティバス。田原市が運営する「ぐるりんバス」は、一昨年のダイヤ改編後に利用者が大幅に減少し、市内のフリースクールに通う学生に影響が及んでいる。蒲郡市形原地区を循環する「くるりんバス」は、地域住民らが運営方針などを策定。年配者の貴重な交通手段となり、好評を博している。

視点

■利用者が減少し、試行錯誤

田原市の「ぐるりんバス」は2002年から運行を開始。15年10月に、路線バスとの重複エリアの解消などを目的に大幅にダイヤの改正を行った。再編前の2014年度の年間利用者は、約18万1000人。再編後の昨年度は約10万人、本年度も同程度の利用状況にとどまり、乗車数が伸び悩んでいる。市中心部へ向かうには路線バスに乗り継ぐダイヤが増え、市職員は「バスの乗り換えに抵抗を感じる市民が多いのでは」と利用者数の減少を分析する。

市は15年、路線バスを補完する交通機関とするため、ぐるりんバスを再編。各地区から中心部へ向かう路線から、区内を巡るダイヤを増加させた。15年からの3年間は「試行期間」として、各地区の利用状況を注視。今年4月には、表浜地区と中心部を結ぶ2路線を統合させ、循環路線へと変更して利便性を高めた。市職員は「今後必要なら路線は、地域と協議して再編を進めていく」と話す。

■学区生徒の通学手段確保を望む

野田町のフリースクール「ゆずりは学園」には、中学生から大学生まで、105人が在籍。改編前は、生徒が三河田原駅から運賃100円のものぐるりんバスを利用して通学していた。現在は、学園がスクールバスを使って生徒の登下校をサポート。登校人数の多い日には、スクールバスが駅と校舎を往復し、スタッフや保護者の乗用車に相乗りして下校する姿もみられる。同駅から学園まで、路線バスとぐるりんバスを利用すると、往復で960円の費用がかかる。生徒は、名古屋市や豊橋市などから通学。渥美線の運賃を含めると、多額な交通費が必要となる。在籍する生徒の約4割が母子家庭で、経済的に厳しい世帯が多い。同学園の香智彦理事長は「バスを

■地区主導で企画して好評

蒲郡市の形原地区を循環する「あじさいくるりんバス」は、2015年4月に運行を開始。現在は週に3日、地区内の店舗や病院などを巡っている。今年10月には、利用者が1万人を突破。バスの運行計画を策定した「形原地区公共交通協議会」の天野忠則会長(72)は、「地域や住民主導での取り組みがスムーズに行えた」と振り返る。形原地区では、約10年前に路線バスが廃線。食料品などを販売する小規模な店舗の閉店も相次い

だ。そのため、車を持たない高齢者などは買い物や通院ができない状況に陥った。協議会は、9地区の総代や民生委員などで構成。メンバーは、交通の空白地帯解消や「買い物難民」となった住民のため、支線バスの運行を市に提案した。バスの総代が停留所前の住民と交渉。約500メートル間隔で、30地点以上のバス停を設けた。

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ

バスは、メンバーが車を走らせて検討。足腰の悪い高齢者の負担なども考慮して決定した。運行が始まった2015年度の年間利用者は計3160人。昨年度が計3927人、本年度も昨年度を上回るべ



形原地区を走る「あじさいくるりんバス」(蒲郡市形原町で)

(佐々木雄紫)